この鳥居は木造の「明神鳥居」で、高さ12メートル、幅17.1メートルあり、この種の鳥居としては日本最大のものです。1本の柱の直径は1.2メートルで、構造全体の重量は13トンあります。南神門の第一鳥居と同じく明神様式で建てられており、最上部に反りのある笠木が付いています。北参道と南参道が合流地点、本殿へと続く正参道の入口となっており、「大鳥居」と呼ばれています。大きさが目立つことから、この鳥居が明治神宮を象徴する建物の一つとされることもよくあります。

元の大鳥居は、1920年に台湾の阿里山山脈の樹齢1,200年の檜（ヒノキ）を使って建立されました。残念ながら、元の鳥居は1966年に落雷によって破壊されてしまいました。現在の大鳥居は、樹齢1500年の檜から作られました。

現在の鳥居の檜そのものが、台湾の丹大山の山腹で、東京で材木商を営む篤史家によって発見されたものです。彼は、元の鳥居が1966年に落雷で破損した後、鳥居再建のお手伝いをすることを誓いました。商売をご加護してくれていた神に感謝するためです。同じ仕様の木を日本国内で見つけるのが難しいとわかると、氏は正しい木を探して何度も台湾を訪れました。多くの人々の助けを借りてやっと元の場所から切り出され、明治神宮に運ばれ、1975年12月23日に遂に完成の日を迎えました。